

作品を大切にすることについて、また、「過去」でありながら、「現在」として生かし続け、「見(魅)せる」という美術館の役割に改めて考えを巡らし、その大切さを再認識しました。(hina)

に改訂して、紙面を拡大するとともに、デザインも一新したのです。判型はB4判の二折からA3判の四折（4ページ・両面カラー／第50号からは片面モノクロ）へと拡大して、紙面としては、2倍以上になりました。

美術館の「情報誌」という位置づけを徹底して、展覧会の広報（宣伝）的な要素を排して（代替物として「イベント・ガイド」隔月刊を同時に創刊）、美術館の活動全般に渡る充実した記事を揃えて、圧倒的な文字量（総文字数は約20,000字）を確保したのです。「編集後記」には、「今後は来館者の皆さんと美術館をつなぐ交流誌として、美術館活動の現場をリアルに伝えていきたいと思っています」と記されていました。

新しい記事としては、第1面の巻頭(から第2面にかけて)は創刊から継承した最重要の記事を「特集」(4,000字)と題して、文字量を倍増しました。所蔵作品に関連することだけでなく、名古屋市美術館に関係することへ拡張して、内容の充実と深化を目指しました。

第1面の下段には、「天声人語」を模して、「眼光紙背」の故事を応用した「眼光世背」(900字／第63号から「時の話題」に改題)欄を設けて、美術館に限らず、美術・文化の分野における社会的な動向について、学芸員の眼から鋭く洞察した記事の掲載を開始しました。

そして中段には、「アートペーパー」としては初めての依頼原稿による連載記事として、当時、名古屋市美術館参与であった馬場駿吉さん(名古屋ボストン美術館長)による「現代美術への接近法」(1,000字／第72号まで)を新設しました。この連載は、後任の参与であった石黒鏑二さんの「アートの旅『過去・現在・未来』」(第73号～第84号)、美術評論家の中村英樹さんの「明日を呼ぶ私の記憶」(第86号～第99号)へと継承されてきました。

第2面には、展覧会(特別展)に関連した記

展覧会の舞台裏

廣 報 5

今回は広報といっても、少し違った角度からアプローチしてみたいと思います。これまでチラシやポスター、インターネットなど、展覧会の内容を広く伝えるための媒体(メディア)について考えてみましたが、展覧会そのものの広報力、特に展覧会タイトルに着目してみたいと思います。展覧会に限らず、どんなモノを売り出すにしても、そのモノの名前が果たす役割の大きさについて異論のある方はいないでしょう。

歌手や俳優、あるいは小説家が、売れるまで何度も名前を変えたというような事例はみなさんいくつもお存知かと思います。プロとしての実力は十分にある、発表している作品も決して悪くない、努力は誰にも負けないほど積み上げている、しかしなぜか人気が盛り上がらない、といった場合、現状打破の一方策として名前を変えてみるというのは確かに一つの手ではあります。それが功を奏するか否かは神のみぞ知るという事でしょうが、例えば世界一有名なネズミ、ミッキー・マウスの名前について、当初生みの親のディズニーは「モーティマー・マウス」と名付けるつもりだったそうで、果たしてその名前で現在のようなスーパー・スターになっていたかどうか、議論の分かれるところでしょうが、どんな国の人々にとっても覚えやすく発音しやすい「ミッキー」に大いに分があることは間違いないでしょう。

展覧会 現在進行形

生誕130年記念
藤田 嗣治 展

2016年4月29日(金・祝)～7月3日(日)

藤田嗣治といえば、つい10年ほど前まで最も展覧会を開催するのが難しい画家でした。藤田の未亡人、君代夫人が著作権に対して大変厳しかったことがその理由ですが、元をた



事として、一般には知られざる「展覧会の舞台裏」(1,200字)の連載紹介、美術館が企画・準備を進めている特別展の現況を伝える「展覧会—現在進行形」(800字)、閉幕した展覧会に寄せられた「感想ノートから」(900字)の来館者の温かく厳しい感想の抜粋を集めました。これらは改訂以前の「トピックス」や「特別展より」のなかで散発的に採りあげられた内容を分類・整理して定例化したものです。

第3面には、常設展を舞台とした教育活動の関連記事をまとめました。常設展の展示作品のなかから美術館が指定した作品の面白いところを、来館者が次に来る来館者のために書き残すというコーナー「ここがおもしろい！」(常設展示室1と2の間の休憩室に設置されています)に集まった感想を抜粋して紹介する「どこがおもしろい?!」(1,800字)、常設展に展示されている画家の画歴を紹介する「郷土作家列伝」(800字×2本)が新設され、この他に短期間で終了しましたが、新しい常設展の見所を紹介する「常設展の《壺》」(第57号まで)、1998年10月から常設展

話が脱線してしまいましたが、展覧会のタイトルの付け方は大きく二つに分かれます。一つは作者やコレクションの名前を直接タイトルにするものです。「ゴッホ展」、「ピカソ展」、「ルーヴル美術館展」といった具合に、作者やコレクションがすでに十分に知名度がある場合は、その知名度を利用してストレートに訴えかけるのが最善だという判断です。もう一つはその逆で、作者やコレクションについて、一般の方々がほとんどご存知ない場合、あるいは複数の作者の作品のある視点によって紹介するテーマ展のような場合です。我々がタイトル付けで苦心をするのはもちろん後者の場合で、予備知識のない方々に、いかに展覧会への関心を喚起するかに焦点を絞ってタイトルをひねり出します。昨年度はこのタイトルへのこだわりを強く感じさせる展覧会が二本ありました。一つは9月から10月に開催した「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展。ヤゲオ財団コレクションより」で、もう一つはそのすぐ後に開催した「ゴッホ・ビトウイーンズ：こどもを通して見る世界展」です。いずれの展覧会も、内容の点では非常に高い評価をいただいたのですが、入場者数という点ではかなり厳しい結果になりました。展覧会担当者のこだわりと、一般の方々の関心とが一致しなかったことは残念でしたが、ならばどうすれば良かったのか、という問いに答えるのは容易ではありません。試行錯誤の積み重ね以外なし、というありきたりの結論に落ち着いてしまうのですが、未知の優れた美術の紹介こそが広報の腕の見せ所、と肝に銘じ、捲土重来を期したいと思います。(F)

でのギャラリー・トークを開始したボランティアの皆さんの自己紹介欄「ガイド！ガイド！ガイド！」(第57号まで)、美術館教育について解説する「Museum Education案内」(第62号まで)がありました。

第4面は、学芸員を主役にしたページにしました。学芸員がどのような日常を送り、どのような業務を行い、どのような体験をして、どのような思いを抱いているのかを語る「学芸員の仕事」(1,200字／第64号まで)をはじめとして、学芸員が見た展覧会や読んだ本、観た映画や演劇、聴いた音楽などを紹介する「展評」(800字 × 2本)、「BOOKS」(700字)、「Culture, Movie, Drama & Music」(900字)を新設しました。このような学芸員による批評欄は、おそらく美術館ニュースとしてはあまり前例のない画期的なものであったのではないかと思います。とくに「展評」は、2000年以降、名古屋地域などで開催された多彩な展覧会を記録する資料としても将来的には意味のあるものになるでしょう。

こうして全面改訂された「アートペーパー」の新しい挑戦がはじまりましたが、美術館の「冬の時代」が続かなかで、「イベント・ガイド」が刊行できなくなったために、2004年から少しずつマイナー・チェンジを行って、厳しい状況に対応しています。

2004年秋の第63号では、第3面に「協力会通信」を復活させるとともに、「ME案内」を

感想ノートから

戦後70年を迎えた激動の夏に…

画家たちと戦争：

彼らはいかにして生きぬいたのか展

2015年7月18日(土)～9月23日(水・祝)

戦後70年の夏に開催した本展は、先の日本の戦争の時代を生きなければならなかった画家たちの苦闘の足跡を、残された作品を通して見ることで、あらためて戦争について考える機会になればと企画しました。安保法案の採決に全国が騒然とするなか、戦争と平和に関心のある老若男女の皆さんが来館されました。『感想ノート』のなかから、アット・ランダムに感想や意見を以下に抜粋します(括弧内は筆者による補足、文字・文体は尊重しました)。

▲戦争がやっちゃいけないとあらためて思った▲戦争がどんなものか、実際にこの目でみたことがないから、今までよくわからなかったけれど、戦争がざんこくなものだと、絵を見て伝わりました▲戦争の時代となると、描け！と言われて描いていることもあって、モチーフも色も突然変わってしまうんですね。女の人の裸とか描いていた人が、戦地

どの時を経て、今ようやく私たちは藤田の実像と正面から向かい合う機会を手にしたと言えます。

今回の藤田嗣治展は、画家の生誕130年を記念して開催するもので、「東と西を結ぶ絵画」という副題を付けました。これは藤田の絵画が、日本画と洋画の二つの伝統の上に成立した技法によって描かれているという意味と、画家自身の存在が日本とフランスという異なる文化の間で揺れ動いたという、二つの意味が込められています。東西の文化の融合と対立は古くて新しいテーマですが、藤田という画家はまさにその象徴的な存在といえる

継承するかたちで「美術館Q&A」(第85号まで)を新設しました。続く2005年冬の第64号からは「イベントレビュー」を「協力会通信」との交替ペアとして新設して、春の第65号からは第4面の「BOOKS」と「Culture…」を統合することで、「イベント・ガイド」を再掲載せざるをえないことになりました。

これ以降は、一応の安定を得て、刊行は続けられましたが、開館20周年の2008年春からは季刊ではなく年3回の発行になりました。

しかし、東日本大震災が発生した2011年春の第86号において、新たな取組みとして、第3面の「美術館Q&A」の終了により、「イベント・ガイド」を移動させることで、第4面に統合されていた「BOOKS」と「Culture…」を再び分離するとともに、「展評」を1本増加しました。近年の新聞各紙の「展評」欄の削減に対して、名古屋の若手作家への応援の意味でも、美術批評を守る意味でも、少しでも「展評」を増やしたいという美術館の心意気を現わしています。

このようにして四半世紀を数えた「アートペーパー」は第100号を迎えました。いま現在、美術館の「氷河期」は終わっていませんが、このような苦境のなかにおいても「アートペーパー」を刊行し続けることが、美術館の存在証明となるのではないかと確信しています。これからも名古屋市美術館ニュース「アートペーパー」を愛読いただければ幸いです。(sy)

の汗と泥と疲労に満ちた兵隊さんを描いていたり、壺描いていた人のモチーフが機関銃になったり…すぐ良い時期に開かれた展覧会だと思いました。少しでも沢山の人の目に触れますように…▲せんそう時代にうまれた子はかわいそうだと思いました▲戦争になると国民すべてが戦争に参加させられる。画家も戦意こうような絵を描かされる。そんな中で松本竣介の立ち上がっている絵が印象的だった。立っていることが存在感をきわだたせていた。再び戦争を起こすことのない日本を平和を守っていかねばいけないうつづくと思う▲戦争について考えるど難しすぎるけど、その時代に描かれた絵は暗いけど人間の悲しみが美しく描かれてる。戦争を経験しなければ今回のような絵はけなかつたと思った▲画家たちが戦争によって、やむを得ず作風を変えていった、変えざるをえなかつたということがよくわかりました。戦争(の前)はシュルレアリスムやフォーヴィスムの影響を受けた(作家は)若々しくて生き生きとしていたのに、戦争がはじまると、どの作家も色彩が暗くなって、戦後も影を落とし続けていったんですね。もしも戦争がなかったら、画家たちはどんな絵を描いたのだろう、と思わずにはいられません▲絵から戦争のむなしさ、おろかさ、悲しさがつたわかりました。(sy)

でしょう。その作品と生涯において、東と西の文化はどのように融合し、また対立したのか、この展覧会は探ります。約150点の出品作の中には、近年、君代夫人没後にランス市に寄贈された未公開作品が多数含まれており、藤田芸術の新たな側面を知るまたとない機会となるでしょう。また、国内に秘蔵され、今回初めて紹介される作品も多数含まれています。不幸な歴史の中で埋もれていたこの画家の真の姿に再び光を当て、本当の意味で彼の芸術が東西を結ぶ新たな架け橋となることをこの展覧会は目指します。どうぞご期待ください。(F)

郷土の作家たち

吉本 作次(よしもと さくじ／1959ー)

1980年代後半、“ニュー・ペインティング”と呼ばれた「表現主義」の再来は、絵画の「復権」を高らかに宣言するものとなった。筆触の痕跡までも消すミニマル・アートのストイックな方向性やコンセプチュアル・アートによって氾濫した記号は、モノとしての平面性を主張するあまり、観る者に絵画を読ませることすら放棄させた。また、同時代の彫刻や映像が空間を構成するインスタレーションへと発展していったのに対して、「絵画の終焉」が叫ばれ、その存在意義自体が問い直された。そうしたなかで、ニュー・ペインティングは、何よりも絵画のテーマとして「物語」を復活させ、大画面によってスペクタクルを展開した。当地・名古屋に於いて絵画の復権を強く印象付けたのが、吉本作次であった。重厚なテクスチュアを見せる画面と、それとは全く対照的な“スマイル・マーク”を想わせるグラフィカルなイメージ、あるいは浮遊するかのようなフォルム。抽象表現主義的であると同時に“ポップ”である、その組み合わせが、日

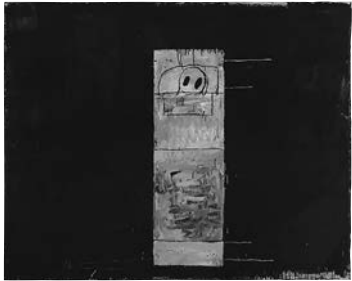
どこがおもしろい？！

今回は、福田美蘭(1963年～)が制作した《陶器(スルバランによる)》(1992年)という作品について、感想をお寄せいただきました。これは、17世紀スペインの画家、スルバランの描いた陶器の絵を下敷きにして展開された作品です。ここで彼女は、私たちが時々目にするモザイクの手法を用い、また、目を動かすと絵が変化する、レンチキュラー・レンズも採り入れています。これらの現代的な方法によって、スルバランの絵はどのように変化しているのでしょうか。今回は二つの作品を上下に展示していましたが、上に展示された絵では、並んでいる壺の左から2番目にモザイクがかけられています。そして下に展示された絵では、並んでいる壺がテーブルから落ちるというストーリーが表現されています。この二つの絵をご覧になった皆さんは、それぞれいろいろな想像をされたようです。

気持ちの持ちようで見えなくなるものってあると思います。また気分の違いで全く別のものに見えたり。だから毎日見ているものも、景色も、人も、実は全く同じものは見れなくて、今、その瞬間だけのものだったりする。この両作品はそんなことを思わせた作品でした。だから今見れるものを一生懸命見て目に焼きつけておくべきだなと思いました。明日にはもうないかもしれないから。(S.R 18歳)今が完全には見えず少し先の今が!ほんやりと見える、そんな気分になった私は、ちょっとでもいいから現実から目をそむけたくていっているのでしょうか。少し先の今もつぼが倒れる惨事と思ってしまう私は悪い将来を敢えて望んでいるのか、来てほしくないという願望の表れなのか。(O.N 14歳)天国と地獄?それとも美蘭さんの3.11?(Y.T 60歳)同じもののはずなのに少し変えるだけでこんなに違って見えるなんておもしろい!「ものの見方を変える」というのもおもしろいものですね。(15歳)モザイクがあるだけで見てはいけないもののように感じてしまうところがおもしろい!下の絵はテーブルクロス引きをしたみたいで、左から2番目のだけがこわれちゃったのかなと思った。いろんな解釈が人それぞれ出来て面白いと思った。(K.S 22歳)芸術がモザイクに隠されている訳ですな?分かります。大人ですから。大事な事ですよね。モザイクは必要です。はい。ソコがツボなのです! (笑)(大人 ?歳)同じ絵のはずなのに、モザイクがかけてあるだけでそこに何があるのか気になります。モザイクのうしろに何があるのか気になるのは、人間のさがなのか・・・。福田美蘭さんのプライベート感がとても表現

本的な文化状況を象徴し、次代の表現を予感させた。まもなくして、“ニュー・ペインティング”は退潮することになるが、その後1990年代の日本の現代美術に於ける絵画の復権については、周知のとおりである。

1990年代後半、吉本の表現は大きな展開を見せた。激しい筆触や厚塗りによる物質感の後退し、画面には装飾的な曲線によって木立や雲、あるいは空気の流れが描かれた。うねるような、動勢を秘めた曲線は正しく「生命」の表象を連想させ、牧歌的な風景を垣間見るような構図からは、日常的な物語へと翻訳された神話や歴史の説話を読むことができる。吉本作次の作品は、単なる表現のトレンドに終わることなく、今に生きる人々の想いや共感を受け止める普遍性を獲得しつつある。岐阜市出身、名古屋芸術大学卒業。1997年には名古屋市芸術奨励賞を受賞している。(J.T.)



吉本作次《中断された眠り1》1985年 個人蔵



福田美蘭《陶器(スルバランによる)》1992年

されていて面白い。(明石屋さんま 53歳)人の記憶なんてこんなもんじゃないかな。ほとんど憶えてるけど、表現しろといわれるとわからない部分があったり、全体的にあやふやだったり。でもそれはそれで問題なく生きているし、陶器一つ一つまで忠実に再現できる程の記憶力と再現力を持っていたのならきっと人間の頭(脳)はもっと大きくなるだろう。今の生活にはこのぐらいがいいんだと思う。(L.K 23歳)“一寸先はやみ”とか“諸行無常”とか“形有る物はいつか壊れる”とかそんな言葉が思いつきました。人間が眼で見て、脳で認識した物体も確かな存在ではなく、安定と思える事もほんの一瞬で不安定となり、壊れてしまうかもしれない。そんな人の世のはかなさみたいなものを私は勝手に作品から感じ取りました。なんか・・・ちょっと・・・考えさせられました。(R.D 56歳)先入観の怖さ。2枚の絵を見比べて、勝手に同じものが描かれていると想像してしまうが、実は全く異なるものかもしれない。目に見えるものに拘るのではなく、目に見えないものこそ、想像して大切にしていきたいと思った。・・・人との関わりと同じですね。(kurikinton 30歳)モザイクを取ってみたいくなりました。人によって正体は何なのか異なる想像をするのが楽しいのかもしれないですね。(21歳)つぼが4つならんでいると思うのですが、上の絵も下の絵も、ほんとうはいくつ描かれているのか判然としないとこが面白いです。上は、モザイクがかかっているものがつぼなのか、ちがうものなのか、これはモザイクなのか、考えさせられます。下は、つぼが倒れているようにも見えますが、上と下の作品の関係性が不思議です。スルバランによる元となった作品があるのだと思うので、それも見てみたいくなりました。(M.A)

以上、さまざまな感想をご紹介させていただきました。(AN)

鷲見 麿(すみ まろ／1954ー)

鷲見麿は、岐阜県関市(旧洞戸村)の生まれ、現在は三重県四日市市に在住する。本名、雅次(まさじ)。中学生になった頃から花の栽培に熱中する。また、この頃からだを悪くし、休学を繰り返すなか、ユトリ口の複製などを手本に絵を描きはじめる。中学校卒業後は名古屋の画材店に就職。以後、様々な職に就きながら、絵画制作をつづける。1975年に中部独立展で作品を発表。このとき画家の森眞吾と作品交換し、それを契機にギャラリーユマニテ画廊主の西岡務の評価を得る。以来、同画廊と1992年からは白土舎を中心にして作品発表を行う。制作手法を独学した鷲見は、名画やグラビアの構図や構成を借用し、そこに美女を加えて、独自の世界を作り出している。「世界は模様である」と鷲見はいう。その認識は、画面を格子状に区切り、矩形をひとつずつ彩って行く模写の技法と作品とする対象がいずれも実体を欠く虚構としてあることから生じていよう。制作では虚構を極める試みを多々行っている鷲見だが、実生活では家事と二人の子の育児を担い、保育運動、PTAや障害児者の教育問題など、社会問題に長年にわたり多様に取り組んでいる。現在の鷲見は、画廊や美術館での作品発表から距離を置き、新しい美術のあり方をその経験を発展させつつかたちに

イベントレビュー

11月7日と8日、白川公園では「サイエンス&アートフェスティバル」が開催されました!美術館と科学館、そして栄二丁目周辺の商店街や町内会が連携して年に一度開催されるもので、今年で4回目を迎えました。今回も、科学館前の広場では、コンサートをはじめ様々なパフォーマンスが繰り広げられ、広島焼きや美味しいコーヒー、似顔絵やネイルアートまで、様々な出店が立ち並びました。美術館も「アート大会」として、オリエンテーリング形式の「スタンプラリーで彫刻を探そう」「不思議なフィルターでナゾとき」に加え、作家の富永敏博さんによるワークショップ「作って、かぶって、楽しいカツラ!!みんな集まれ!カツラのツリーを作ろう!」が開催されました。二日目は残念ながら雨でスタンプラリーは中止になりましたが、初日はお天気に恵まれ、スタンプラリーやナゾときも大賑わい、カツラ作りのワークショップも、最初は参加者が少ないのかなあとと思いきや、次々と制作されたカツラを被って歩く人たちの宣伝効果もあり、お客さんがどんどん増えて、本当にたくさんの楽しいカツラが出来上

イベントガイド

■特別展

ポジション2016アートとクラフトの蜜月5回目となる今回のポジション展では、『アートとクラフト』を採り上げます。ものづくりの盛んな愛知・名古屋から、アートとクラフトの新しい在り方を発信する7名の作家の個性溢れる作品を紹介します。会期：1月5日(火)～2月21日(日) 料金：一般1,100円・高大生800円・中学生以下無料【関連催事】●作家によるギャラリートーク日時：1月10日(日) 企画展示室内・無料 10時～KIM HONO、10時30分～水野誠子、11時～中谷ゆうこ、14時～稲葉佳子、14時30分～水谷一子、15時～米山より子、15時30分～徳田吉美●ペインティングパフォーマンス「境界を越える」～日榮一雅のサウンドとともに～日時：1月8日(金)午後4時30分頃から地下ロビー・無料●ワークショップ①お米で首飾りを作ろう!日時：1月24日(日)午前10時から②紙でヘッドオブジェを作ろう!日時：1月24日(日)午後2時から③鳥になったつもりで巣を作ろう!日時：1月30日(土)午後2時から

しようと活動している。

数年をかけて制作された《アレクサンドロス大王の戦い》(1997ー99年)や《ヤン ファン アイクのdream a dream》(1997ー2003年)などの代表作を含めて、鷲見の作品のほとんどは個人蔵となっている。なかでもドイツには初期から近作までを含む大コレクションがある。昨年度(2014年)、名古屋市美術館には白土舎コレクションの50点が寄贈により収蔵された。鷲見に言及した論考は、井上昇治による「鷲見麿とは何者か」(『リア』No.17、リア制作室、2007年9月1日発行、pp.28-31)の他わずかしかない。この度の収蔵とそれに伴う展示機会の増加が作家再考の契機となることを期待したい。(み。)



鷲見麿《ヤン ファン アイクのdream a dream》1997ー2003年 個人蔵(日本)

がりました。事前に富永さんと様々なカツラの試作を作っていたのですが、当日みなさんが作ってくださったものは、予想だにしないような独創的なものばかり、我々が想定していたカツラ concepts を覆すようなものがたくさん生まれました。参加してくださった方は、最後に出来上がったカツラを被って、グラウンドに設置していたツリーの飾りとなって頂き、ドローンで空中撮影をいたしました。ところで、サイエンス&アートで何故カツラなの?と思われるかもしれません。作家の富永さんによれば、カツラはサイエンスとアートという人智の融合によってできるものだからとのこと。確かに、みなさんが作ったカツラも人智の結晶、それぞれの渾身の思いが込められた素晴らしい作品からアートだけではなく、サイエンスにもつながっていく発想もあるかもしれないなと思いました。(hina)



※①～③地下ロビー・無料・抽選各20名●作品解説会日時：1月17日(日)午後2時から解説者：中村暁子(名古屋市美術館学芸員)2F講堂・無料・先着180名■常設展名品コレクション展Ⅲ(前期)名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。会期：1月5日(火)～2月21日(日)エコール・ド・パリ：スローンとマーシュ～同時代のアメリカ美術～メキシコ・ルネサンス：ホセ・クレメンテ・オロスコ現代の美術：ブランクー虚無郷土の美術：渡欧した郷土の画家たち■常設企画展北川民次の絵画技法ー自然科学的調査と再現研究を通してー北川民次が約15年にわたるメキシコ滞在中に会得した絵画技法について紹介します。会期：1月5日(火)～2月21日(日)■第4回コレクション解析学日時：1月24日(日)午後2時から演題：「絵画のかたちと抽象」2F講堂・無料・先着180名講師：笠木日南子(名古屋市美術館学芸員)作品：辰野登恵子《WORK 86-P12》1986年休館日は月曜(祝休日の場合は翌日)、12月22日(火)～1月4日(月)、2月23日(火)～3月4日(金)です。詳しくは、美術館HPhttp://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください。(KT)

展評

2015年7月24日(金)～9月23日(水・祝)
メナード美術館

鈴木五郎

土に生きる 土に遊ぶ

鈴木五郎(1941ー)は愛知を拠点とする陶芸家です。豊田に生まれ、同所に工房を構えて、瀬戸や美濃の焼物として知られる黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部といった作品を制作しています。荒川豊蔵(1894ー1985)が再興したこれら桃山陶(桃山時代から江戸時代初期の焼物)の技法と美意識を受け継ぎながらもオリジナルや先達の模倣には終わらない作家の個性がそれらには表わされています。成形したものを分割し、異なる技法で焼成したものを呼継ぎによって元の形とする「呼継」、そこから展開し、異なる技法を分割なしに可能にし



会場風景 (撮影：林達雄)

た「五利部」など、鈴木が考案工夫したものは少なくありません。「五利部」は、鈴木五郎の「五」、千利休の「利」、古田織部の「部」からなる鈴木 of の造語です。利休、織部を継ぐものという自負が、読み取れます。この度も出品されていた《呼継大壺 銘 無尽蔵》(2007年、岐阜県美術館蔵)は、その名のように、鈴木 of の

展評

Part1:2015年10月4日(日)～31日(土)
Part2:2016年2月26日(金)～3月27日(日)
港まちポットラックビル

THE BEGINNINGS(or Open-Ended)

会場は、名古屋市が策定した「港まち活性化の方針」に基づいて2006年8月に始動した港まちづくり協議会の拠点となるスペースで、地下鉄築地口駅から至近距離にあります。この3階にギャラリーが設けられ、今秋から新しいアートプログラム「Minatomachi Art Table, Nagoya」がスタートしました。その柿落としが本展です。ペーター・フィッシュリ&ダヴィッド・ヴァイスの映像作品《事の次第》(1986ー87年)を通期で展示し、彼らの作品に影響を受けたアーティストの一人である毛利悠子の過去作品を前期に、現地でのリサーチをもとにした彼女の新作を後期に発表するとのこと。《事の次第》に既視感を覚えたのは、Eテレの番組『ピタゴラスイッチ』に登場するクリップやビー玉、定規など身近なもので構成した「ピタゴラ装置」に馴染みがあったからでしょうか。ドミノと同じく最初のきっかけ以外は連鎖的に運動を引き継いでいく装置ですが、ここで使われるのはタイヤ、ドラム缶、脚立など大掛かりなもの。ドライアイスや液体石鹸、灯油、花火、火薬類も用いて物理的な運動だけでなく化学反応を織り交ぜています。《事の次第》がカメラワークによって見る人の



毛利悠子《大船フラワーセンター》2011ー2015
撮影：富田了平

視野を限定し、絵巻物のように展開を少しずつ明らかにしていく一方、毛利さんの《大船フラワーセンター》では作品を構成するほぼ全ての要素が最初から空間に置かれています。種明かしがされているようで、その実、回路は複雑に絡み合い、何と何がどこで繋がって、どのような反応を見せるのか、じっくり見ていると掴めない部分や不可解な展開に狐につままれた気になります。

どちらも綿密に計算された部分といざ動くまで予測のつかない部分との拮抗するさまを見せることで、立場の異なる人々の関わりとその連鎖によって広がるまちづくりの醍醐味を象徴していますが、後者には不安定さとともに、目には見えないけれども確かにある繋がりのようなものをより強く感じました。港まちでの調査を経た2月末からの後期新作展示を楽しみに待ちたいと思います。(3)

BOOK

『メディア・モンスター
誰が黒川紀章を殺したのか?』

曲沼美恵著、草思社、2015年

いささかセンセーショナルなタイトルが付けられていますが、一読すれば広範な取材と丹念な資料の分析に裏打ちされた、手応えのある内容であることが分かります。600ページを超える大部の評伝ですが、巧みな文章にも助けられ一気に読了する面白さに満ちています。黒川紀章は言うまでもなく名古屋市美術館の設計者で、生前評者も何度かお目にかかったことがあります。この評伝のいたるところで証言が残されているように、頭脳明晰を絵に描いたような人物でした。およそ発する言葉に無駄というものがなく、事柄の本質に最短距離で到達し、それを簡潔明瞭な言葉で伝達するその姿に、何と頭の良い人だろうと感嘆することしばしばでした。それほど鋭敏な人物が、晩年突如として都知事選や参院選に出馬する姿を見て、大きな違和感を覚えたことは言うまでもありません。病気のために痩せこけ面変わりしたその様子を見て、「乱心」の二文字を思い浮かべた人も少なくないでしょう。しかし、この評伝は、一見奇怪に映るその晩年の行動が、黒川紀章の半世紀を超える建築家としての軌跡の当然の帰結であったことを解き明かしてくれます。大衆が巨大な力を蓄えていった戦後の時代に寄り添うようにして生きたこの建築家は、いかにもエリート然としたその外見とは逆に、大衆の支持なくして未来の都市像を描くことの不可



能を熟知しており、存分にマスメディアを利用することにより自らの建築理念の実現を図ったのでした。外連味の強い本書のタイトルは、ここに由来しており、いたるところで彼とマスメディアのつながりが分析されます。また本書は、黒川紀章の生涯を丹念にたどることにより、建築のみならず日本の戦後史全般の優れた回顧にもなっています。ただし評者にとってこの本の一冊の読みどころは、黒川の建築理念でも、彼とメディアとの関わりでもありません。多くの同時代人の証言によって、生き生きと浮かび上がる黒川紀章その人の存在感、人間性こそが何よりもこの本を魅力的にしていると感じました。多少の脚色や想像はあるのですが、会話を連ねて語られる様々なエピソードは臨場感にあふれ、瞬く間に読者をその世界の中に引きこみ、野心と情熱に満ちた建築家と対面させます。鮮やかによみがえるその姿を追って読み進め、政治力によって自らの理想を実現せんとして敗れる終盤には切なさを感じるほどでした。(F)

作陶が無尽蔵の力と可能性を秘めているように感じさせます。向かうところ敵なし、といった開けた気概と言っても良いかもしれません。この度の展示は、メナード美術館が開催する初めての陶芸家の個展であり、鈴木にとっても美術館という場所で開催された初めての個展です。鈴木と親交のある同世代の陶芸家の鯉江良二(1938ー)や金子潤(1942ー)の個展が以前既に美術館で開かれていることを思うと、意外でもあり、遅すぎの感もあります。今回は新作として天井に届くほどの高さ(4メートル弱)のある《織部の塔》が出品されていましたが、このような作品をあまり制作せず、壺や皿、茶碗、椅子など、陶芸が範疇

とする形態や形式に自覚的にとどまり、制作を究めていることが、その原因かもしれせん。メナード美術館は鈴木 of の作品を数多く所蔵しており、この度の展示もそれらが核となっています。メナード青山リゾートには、鈴木が指導監修した穴窯「布引窯」があり、展覧会は作家とメナードとの長年にわたる交流から実現しています。こうした関係は私設の美術館ならではのものと言えるでしょう。作家の研鑽が実を結んだ近年の作品はもとより、初期の作品も興味深いものでした。初めて目にしたそれらからは、鈴木もまた時代の流れのなかにあったことが理解できました。(み。)

展評

2015年10月13日(火)～10月25日(日)
gallery noivoi(名古屋市)

横田千明展

ーvoka 牧歌ー

ここ10年ほどの間に、動物彫刻を手がけて脚光を浴びている作家が何人かいるように思えます。中には今回紹介する横田千明さんと同じように、漆を主に使っている作家もいます。動物彫刻というのはなかなか興味深いテーマで、日本の近代彫刻の歴史を振り返ってみると、例えば高村光雲が明治に《老猿》を、高村光太郎が大正末に《鯨》、昭和の初めに《白文鳥》を制作していて、それらは二人の代表作に挙げられます。当時、日本彫刻の近代化を担っていた二人は、堂々たる西洋の人物彫刻に刺激を受けつつも、それとは異なる道、あるいは日本人の美感に響くものを、動物という主題に見出していたように思えます。現代においても、あえてこの時代に人間や抽象形態ではなく動物を作る、という選択は、絵画以上にストイックな彫刻という領域に風穴を開けるというか、こり固まった価値観やヒエラルキーからひらりと抜け出るような、実は前衛的な姿勢と捉えることも可能ではないでしょうか。

横田さんの個展に立ち入ると、実物大の羊やウサギが点在する、一見するとタイトルどおり牧歌的なのほほんとした情景に心が和むのだけれど、実は作品は乾漆造という、日本の仏教彫刻の伝統と切っても切れない技法で



手間隙かけて作られており(羊は1体約3ヶ月)、その意外性が興味をひきます。おそらく横田さん自身は、彫刻の近代性だとか、西洋彫刻との差別化だとか、そんなややこしいことを意識しながら制作しているのではなく、ただ素直に素材としての漆の魅力、ぶっくりとして触りたくなる量感が表現できる乾漆造の特長にひかれて、自然と作りたい題材(羊やウサギ)に辿りついたのだと思います。しかし考えてみれば、漆で羊毛を表現する、というのは大きなチャレンジではないでしょうか。写実性を保ちつつ動物彫刻を発展させていく、というのは意外に難しい道で、美術であるからには置物や剥製、ぬいぐるみとはまったく異なる質や驚きを獲得しなければなりません。擬人化する、類型化する、物語性や装飾性を強めるなど、各作家が採っている方向性は色々ありますが、横田さんの場合、本展で見せはじめた量感表現や表面へのこだわりという、造形自体の奥深さの追及を保ちながら、さらに個性的な、これまでにない動物彫刻を作ってくれるのではないかと期待しています。(nori)

CULTURE, MOVIE, DRAMA&MUSIC

現代音楽と現代美術

現代音楽はお好きでしょうか?この場合、クラシック音楽の分野での現代音楽、という意味ですが。私は、正直言って曲によってはなかなか馴染めないものもあります。どこからを現代音楽と呼ぶか微妙ですが、楽譜を見ても音符はなく記号のみ、のような現代音楽となってくると、訳がわからなかったりしますし、不協和音に思わずイラッとしてしまうことも。そういう方、もしかしたらわりといらっしゃるのかもしれませんが。しかしながら、現在の音楽大学の作曲科では、古典的な音楽というのは作曲の対象としてはあまり認められない傾向にあると聞きました。クラシック音楽の作曲という分野は、現在では現代音楽一色ということになるのでしょうか。それは一体何故なのでしょう?少し前に、古典的ともいえる交響曲を大々的に売り出したベテン師がいましたが、その時、古典への回帰をいいなと思った人もいたようです。聴いていて気持ちのよい古典的な音楽は、いつの時代にも求められているというこ

となのでしょうか。とはいえ、やはり、作曲は現代音楽という在り方は基本変わっていないようです。そして、作曲はしないのに、演奏では古典音楽をばんばんやっているのです。ちょっと不思議な気がします。一方、現代美術、お好きでしょうか?美術の世界では、現代美術が多様に展開されています。好きな人も嫌いな人もあるでしょう。しかし、美術大学においては、音楽とは様相が異なるようです。いわゆる「美大」では、現代美術のみが制作されているわけではありません。日本画にせよ洋画にせよ、彫刻にせよ、古くからずっと続いているような描き方、制作の仕方も、まだまだ健在であり、重要なポジションにあるといえるでしょう。前衛的な美術も求められています。伝統的な美術もまた、求められています。音楽と美術という二つの芸術で、ずいぶん様子が違うのですが、どうも何故なのかよくわかりません。そもそも二つの芸術は、全く異なる感覚器官に訴えるものであり、時間、空間との関係も全く異なっています。そんな風に、大きく違う芸術であるがゆえに、その現在の在り方も違って現れて来ているのかも知れません。皆様はどう思われるでしょうか。(AN)